

2026年の雨水は、2月19日です。

2月19日から二十四節気、第三節目である啓蟄の3月5日までの15日間ぐらいを指します。

雨水（うすい）とは、降る雪が雨へと変わり、雪解けが始まる頃のこと。

山に積もった雪もゆっくりと解け出し、田畑を潤します。雨水の季節は、昔から農耕の準備をはじめめる時期でした。畑や田んぼの上を覆っていた冷たい雪がとけ、田畑を潤していきます。



昔から、雨水は農耕を始める時期の目安とされてきました。

「陽気地上に発し雪氷とけて雨水となれば也」という言葉が江戸時代に発行された暦便覧（こよみびらん）にあります。

暖かい陽気になってきて雪や氷が解け、雨水になる、ということです。

この時に降る雨を「甘雨（かんう）」といいます。

やわらかく降りそぐこの雨は、穀物や草花の成長を助けてくれます。

また「春の雨は花の親」ともいわれるように、やさしく降りながら土にしっかりと育つための栄養を与えます。この時期に降る、春の恵みの雨には、様々な別名があります。

土を養う「養花雨（ようかう）」は、春に降る雨の異称で、草木の芽吹きや花の開花を促す、恵みの雨を指します。冬の乾燥した空気から一転し、潤いを与えて花を育てる雨という意味で、「育花雨（いくかう）」とも呼ばれます。

木の芽雨（このめあめ）は、2月下旬から3月初旬の、木々が芽吹く頃に降るしとしとした細かな春の雨。木の芽の成長を促す「恵みの雨」として知られ、別名「木の芽起こし」とも呼ばれる春の季語。寒さが残る時期に、生命の芽吹きを感じさせる情緒的な雨です。

草花の成長の時期に降る「慈雨（じう）」という名前もあります。

慈雨（じう）とは、日照り続きの際に降る、草木や作物を育む恵みの雨のことです。

特に「干天の慈雨（かんでんのじう）」という慣用句として使われ、非常に困っている時や待ち望んでいた時に差し伸べられる、救いの手や絶好の機会を例える言葉として用いられます。

面白し雪にやならん冬の雨（おもしろし ゆきにやならん ふゆのあめ）松尾芭蕉

「雨水（うすい）」の時季の寒さや景色を詠んだ代表的な作品です。

【解説】 冷たく降り続く冬の雨の中、「この雨は雪に変わるのだろうか」と、

冬から春へ移り変わる自然の微妙な変化を、期待を込めて眺めている様子を描いた句で、凍てつく冬の終わりと、少しずつ暖かさや雪解けを待つ「雨水」の季節の詩情を表現しています。